関心・意欲・態度は客観的に測定できるものなのだろうか

板橋育夫

一、新しい学力観とは何か

一九九一年（平成三）十二月十九日、社会の変化に対応した学校運営等に関する調査研究協力者会議は、学校週五日制にかかわる教育過程の編成、実施などの問題について中間のまとめを発表した。

それによると、「これからの社会の変化に主体的に対応して心豊かにたくましく生きることができる資質や能力を図ることを基本的なねらいとしている。それは、これまでの知識や技能を共通的に身に付けることを重視した教育から、子供が自ら考え主体的に判断し行動できる資質や能力を育成することを重視する教育へと、学校教育の基調を変えることを求めている」と述べている。

学習指導要領、総則の一の一では、「学校教育活動を進めるに当たっては、自ら学ぶ意欲と社会の変化に主体的に対応できる能力の育成を図るとともに、基礎的・基本的な内容の指導を徹底し、個性を生かす教育の充実に努めなければならない」と述べている。

この二つの基本文書を受けながら、新しい学力観に立った教育について、前東京都教育庁指導部初等教育指導課長・島津忍氏は、大要を次のように述べている。

「第一は、児童の側に立ち、創造的で個性を生かす教育を推進することである。これまでの知識偏重の教育からは脱して、少なくとも知識は基礎・基本の生きて働く最小限のものに留め、

あとは、事象や事態の解決に当たって、既習の学習の考えや手法を生かして考えたり、判断したりして自分なりの工夫を凝らす、根気や能力を身に付けることが求められる。

第二は、指導者に依存しないで、常に自ら学ぼうとする主体性を育成することである。

第三は、生涯学習社会における人間の生き方を習得することである。」

さらに、島津氏は論を進めて、新しい学力観に基づいた教育を推進するために、普段の学習指導において「関心・意欲・態度を育成する」ことを強調し、次のような授業の質的転換を求めている。

◎児童の意欲的・主体的な追及プロセスを重視する。
◎目的を明確にし、体験的な活動を計画的にとり入れる。
◎級友やグループと協同して事に当たる楽しさを知る。
◎問題解決の過程で、学習経験を生かし発展・統合する。
◎知識を問うより、考え方・着想を問う発問を重視する。
◎学習のまとめでは、心情面にも視点を置いてまとめる。

新しい学力観に基づく教育を推進したい側の主張を、ちょっと長文だが引用させてもらった。それは、その論点をわたしなりに整理し、考えてみたかったからである。

二、学習指導要領は、「意欲・関心・態度」を育ててきたのだろうか

六月の下旬、職員朝会で校長が、「あと残すところ一か月余りとなりました。そろそろ進度表と見比べて、予定のところまで進んでいるか確かめてみて下さい。夏休みが来たけれど、教科書が終わっていないというようなことがないようにお願いします」と話した。

学期末になると、校長がいつも言うことなのだが、この二年ほどはとりわけ厳しい言葉に聞こえる。ゴールデンウィークだ、家庭訪問だ、運動会だ、校内研究会だと、目の前に山積する諸々の行事や提出物に追われているうちに、「もう六月の下旬になってしまったのか」という感じなのだ。改めて教科書の進み具合を調べてみると「えー」と驚くほどの遅れ具合である。

わたしは、今年、学級担任を離れ、T・T（チーム・テーチング）となっている。今までは、普通「一教室に一人の先生」というやり方なのだが、T・Tは「一教室に二人の先生」という新しいやり方である。本校では、これを中学年の算数指導に取り入れ、わたしは週二時間ずつ、三、四年の四クラスに出張して授業を担当している。こうした関係で、各々のクラスの教科書の進度を知り得ることになったが、六月下旬の時点ではどのクラスもかなりの遅れが見られた。

あるクラスには、この一学期に学習

した新出漢字、読み替え漢字が掲示されていた。次は、三年生（光村）が一学期に学習する漢字である。

（『光村』国語三年上、一学期分）
物語、お母さん、重い、運ぶ、地面、身、着地、動く、着く、苦しい、今日、足元、君、学習、部分、表れる、様子、人物、国立病院、羊、五分、学級文庫、書だな、昭和、一生、しいく委員、詩、落ちる、とび起きる、洋服、着る、道路、大人、練習、発音、夜中、生麦、聞き取る、ろく木登り、ふじた君、苦手、向こうがわ、決心、場所、急に、体育、早い者勝ち、速い、登り始める、左右、所、今度、反対、一等、苦心、意味、受話器、出発、予定、豆、湖、氷、食後、真夏、説明文、住む、相手、表面、次、行列、庭、学者、外れる、行く手、進む、目的、地、持つ、仕組み、研究、交わる、一字下げ、係、中央、開く、決める、交代、重ね合わせる、板、つり橋、流れる、負けずぎらい、畑仕事、一人、緑、返る、葉、開ける、急ぐ、漢字、お宮、笛、有名、昼夜、村長、炭火、鉄道、動物、代金、人口、小筆、小川、習う、動物島、助ける、海岸、川岸、皮、磁石、方向、曲がる、根、通行、たんけん家、生きる、代わる代わる、食事、投げる、上等、植える、題名、近所、図書館、悲しい、童話

一学期に学習する漢字の一覧表を見て、改めて驚いてしまうのである。はたして、これを全部教えきることができるのだろうか。子どもの側に立った時、覚えきることができるのだろうか、と。

今、漢字を例に出したが、算数でも同様のことが言える。新指導要領に示されている指導内容が多過ぎるのである。

「新しい学力観」推進派が、しきりに「意欲、関心、態度」を育てることを強調しているが、それを奪い続けてきたのは学習指導要領そのものでなかったか。この二十年来、指導内容を増やし続けてきたために、年々、勉強の分からない子や勉強嫌いな子が増え続けてきた。指導内容が多いために「じっくり分かるまで教えてやるゆとり」が学校にないのである。

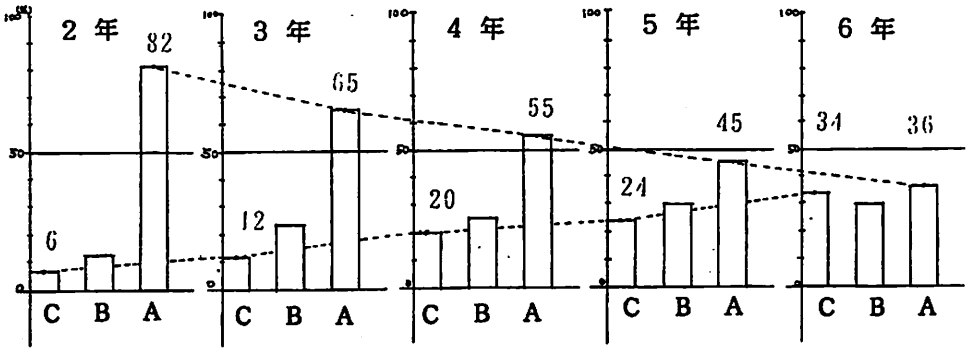
分かろうが分かるまいが、時間を打ち切り前に進まなければ学期末になって教科書が終わらない。こうしたことが、子ども達の学習意欲や関心を奪い取ってきたのである。もし本当に関心・意欲・態度を育てたいのであれば、学習指導要領にメスを入れ、早急に見直すことを求めたい。

三、今までの教育は「知育偏重」だったのだろうか。

「新しい学力観」派が、今までの教育の現状を「知識や技能を共通的に身

に付けることを重視した教育」「知育偏重の教育」と口をそろえて言っている。確かにそうした傾向もある。そうしたことを取り上げるのであれば、それをもたらしている大学、高校入試制度についてメスを入れなければならない。基礎・基本に関わる事項だけでなく、瑣末な雑多な知識が入試に出されている。こうしたものが出てくる以上、合格するためにはそれを習得させようとして、「知育偏重」に陥ることは、事の成り行きからして当然なことである。

前掲の島津忍氏の論文を読むと、こうした教育の現状や根本問題に一切触れることなく教室内の教授方法にのみ力点を置いて論述している。うっかりすると、新しい学力観に基づいた教授方法を採用し、習熟してくると、「知育偏重」の教育を脱脚し、「意欲・関心・態度」が育ってくるかの錯覚にとらわれる。だが、しかし、「本当にそうなのかな」という疑問がわいてくる。



教研式ＣＲＴ算数学力検査（全国平均）

本校は、今年度、研修の重点教科として算数の研究を進めている。子ども達の学力の実態を知るために、前学年までに学習した内容の到達度評価を実施した。本校の実態は、学年によって多少のばらつきはあるが、概ね全国平均に近かった。この結果を検討しているうちに重大なことに気づいた。

二年生の当初、Ａ段階（よくわかる）の子どもたちは八二％いたのだが、三年、四年と下がり、五年生ではついに半分を切り、六年生では三六％にまでなっている。四年間に四六％の子どもたちが「算数はどうもよくわからない」状態になっている。六年生の分布状況を見ると、Ａ、Ｂ、Ｃ段階の子ども達は三分割され、両極分解現象を起こしている。これが本校だけの傾向でなく、全国平均の数値だから事態は深刻だと言わねばならない。

こうした実態を知れば知るほど、「知育偏重」という批判には、首を傾けざるを得ない。上越教育大新井郁男教授

の「これまでの学校は教師が一方的に知識を教える伝達型であったが、一人ひとりの主体的学習に取り組めるよう助成型に変わらなくてはならないといった提言が盛んに最近の教育誌をにぎわしている。しかし、これまでの学校は知識伝達型であったかを問題としたい。これまでに数多くの授業をみせてもらったが、子どもに〝なるほど〟というなずかせるような教師の語りに出合ったことがない。（略）生涯学習の価値観を強調するあまり、学校でも教育が希薄になってはならないことをいいたいのである」の主張の方に賛意を表したい。

学力テストの結果に見られるように、今問題とすべきことは、学習内容そのものが理解されていない子が大量にいるということである。中学年から高学年に、中学校から高校にかけて「勉強のわからない子」が大勢いる現実を無視して、「意欲・態度・関心」を育てようとしても、それは砂上の楼閣にしか過ぎない。

四、「関心・意欲・態度」は客観的に測定できるものだろうか

「新しい学力観」派は、新しい学力観に立った教育をとおして、「関心・意欲・態度」を計画的に高めたいと考えている。必然的に、高まったかどうかを評価しなければならなくなる。しかも、「関心・意欲・態度」を「思考・判断」「技能・表現」「知識・理解」の上位に置き、評価しようとしているから無理が生じてくる。

そもそも「関心・意欲・態度」とは、外部に働きかけようとする心の動きのことである。心の動きであるから、時々刻々と変化する。その変化するものをとらえて通知表に記入しようとするから、無理の上に無理を重ねることになる。

どこの研修会に行っても「関心・意欲・態度を評価するにはどうしたらよいか」との質問がでる。答弁する側も分からないものだから「指導中にメモをとるとか、自己評価、相互評価、感想文等で評価する」といった在りきたりの答弁しかしていない。

はっきりと「子ども一人一人の心の動きの変化まではとらえきれません。全体的な傾向として○○だと思います」と言ったらどうかなと考えるのだが、「関心・意欲・態度」は客観的に測定でき、一人ひとりについて評価できるという前提に立つものだから、おかしな「関心・意欲・態度」の測定テストが氾濫（はんらん）することになる（次頁の図はそのテストの一例）。

これらのテストには必ずといっていいほど「正直に答えなさい」という注釈がついているが、それが通知表に記入されるとか、入試の結果に影響するとかが子どもや親に分かった時、はたして注釈どおりになるものかどうか疑問になる。

また、「関心・意欲・態度」は、その日の気象状態や健康、担任に対する

好き嫌い、よく準備された授業かどうかなど、外的条件に左右される要素が強い。多人数学級か少人数学級か、一人当たりの施設が整っているかどうかの環境にも影響を受ける。それを子どもの能力の一部として、その子だけに責任を押しつけて評価していいかどうかも疑問である。

3年

第④部　時間3分　算数への関心 態度 態度

自分にいちばんよく合う答えを 1つずつ えらび、その記号を書きなさい。
3つの答えをよく見てから、正直に答えなさい。

❶ 計算の練習を自分からすすんでしていますか。
ア　すすんでしている。
イ　しなさいといわれたらする。
ウ　あまりしない。

❷ はかるものによって、ものさしやまきじゃくを使いわけて、身のまわりのいろいろなものの長さを調べてみましたか。
ア　おもしろいので、家でも調べてみた。
イ　学校で先生にいわれたものだけを調べた。
ウ　あまり調べなかった。

❸ コンパスを使って、図形をかくのはおもしろいですか。
ア　形がきちんとかけるので、楽しい。
イ　コンパスを使うのは、おもしろい。
ウ　めんどうだ。

❹ 問題をとくときに、ことばの式が使えることを習いました。あなたはどう思いましたか。
ア　べんりなので、ほかの問題をとくときにも使ってみたいと思った。
イ　ことばの式はべんりだと思った。
ウ　ことばの式はめんどうだと思った。

❺ 算数の問題で、むずかしい問題があったら、どのようにしていますか。
ア　できるだけ、ねばり強く考えてとくようにしている。
イ　わからないときは、人に聞くようにしている。
ウ　そのままにしておく。

五、おわりに

一般論として「関心・意欲・態度」を育てることには賛成だが、推進派が意識的に、現在の入試制度や新指導要領の弊害に目をつぶり、専ら教師の姿勢や教授の仕方を変えれば「関心・意欲・態度」が育つといった論には組することはできない。

また、現在の学校は忙しすぎる。指導内容が多い上に、週担当時数が多い。研究発表会の時はともかく、普段の授業ではぶっつけ本番が多い。こうした、学校が直面している問題に目を注ぎ具体的改善を図ることが重要である。その一つとして、小学校で「二学級三人担任制」の導入を提案したい。週担当時数を大幅に減らし、良く考え準備された授業が試されるようになることが必要だと思う。もし本気に「関心・意欲・態度」を育てたいのであれば、思い切った具体的な手を打って欲しい。

（いたがき　いくお・新津市結小学校）